

多世代居住コミュニティ推進

ハンドブック3

地域で考え、取り組む機会づくり

令和4年3月版

ハンドブック1【共通】
多世代居住コミュニティとこのハンドブックについて

ハンドブック2【地域住民向け】
地域への働きかけ

ハンドブック2-①【市町村職員向け】
市町村の庁内検討・連携

ハンドブック2-②【市町村職員向け】
地域への働きかけ

ハンドブック3【共通】
地域で考え、取り組む機会づくり

ハンドブック4【共通】
地域における集まる場（拠点）づくり

ハンドブック5【共通】
地域における活動の充実・継続的な活動へ

- 本ハンドブックは、随時事例収集等を行い、必要に応じて加筆・修正を図りながら内容を充実させていきます。
- 参考となる取組事例、ご意見、ご要望等がありましたら、神奈川県住宅計画課までご連絡ください。

目 次

ハンドブック3 地域で考え、取り組む機会づくり

| | | |
|----------------------------------|-------|-----|
| 第1章 地域住民・活動団体への声かけの実施 | | P1 |
| 1 住民等への声かけ用のチラシ等の作成 | | |
| 2 住民等への声かけ | | |
| 第2章 地域で話し合う機会 | | P3 |
| 1 活発に話し合う機会に向けて | | |
| (1) ワークショップ形式での話し合い | | |
| (2) 多様な意見を出してもらう仕掛け | | |
| 2 多世代居住コミュニティへの共通認識 | | |
| (1) 主旨説明等には十分な時間を | | |
| (2) 地域主体のまちづくりの具体的な事例を紹介 | | |
| 3 話し合う機会のテーマ | | |
| (1) はじめのテーマは身近なもの | | |
| (2) 参加意欲を高め維持する工夫 | | |
| 4 地域活動や人をつなげ、地域主体によるまちづくりを進める仕掛け | | |
| 第3章 地域でできることの実践 | | P10 |
| 1 小さくてもできることの実践 | | |
| 2 実践によって判明した課題の認識と対応 | | |

第1章 地域住民・活動団体への声かけの実施

地域主体の多世代居住コミュニティを進めるためには、幅広い世代の住民等が話し合う機会をつくり、多くの人に参加してもらうことが重要です。できるだけ多くの住民が参加できるよう様々な方法で声かけを行いきましょう。

1

住民等への声かけ用のチラシ等の作成

目的等をわかりやすくまとめたチラシ等を作成しましょう。

様々な機会を活用し、幅広い世代に情報を伝えることが大切です。

<例：住民等への声かけ用チラシ>

洋光台地区で

多世代近居の取組みを考えましょう

神奈川県と横浜市は共同して「多世代近居のまちづくり」を提唱しています。地域で、「多世代近居のまちづくり」を考えてみませんか。

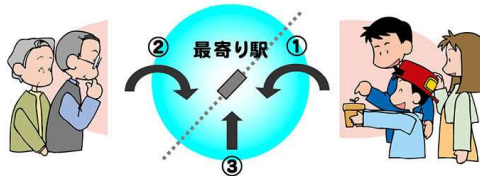
チラシは、気軽に参加できる雰囲気イメージ図などで表現して、わかりやすく作成しま

■多世代近居って何？

多世代近居とは、高齢者・若者・子供たちといったさまざまな世代が、気軽に行き来できる近い地域（約30分以内）に暮らし、一緒にいきいきと生活できる住まい方のことです。

※考えられる近居の仕方

- ①子世帯の呼び戻し
- ②親世帯の呼び寄せ
- ③親世帯の住み替え



■実現するとどうなるの？

多世代近居の実現には、住宅団地と最寄り駅周辺を一体的な「地域」ととらえ、住まい方全般を再生していく必要があります。

地域全体にわたって、お互いに協力して、高齢者や子育ての支援、地域内での住み替え、地域外からの住み替えなどの取組みを通して、住みよい環境づくりや地域のコミュニティづくりなどが進み、魅力ある地域が作られていくことが期待できます。

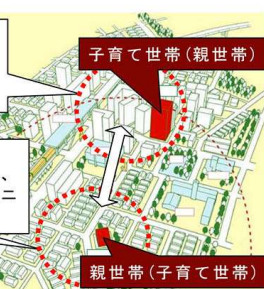
駅周辺再整備

高齢者向け住宅や子育て・高齢者支援施設の整備促進による活性化

住宅団地再生

住替えの促進、空家の活用、住環境の向上、地域コミュニティの維持再生

近居圏内における様々な主体作り



多世代近居の実現

- ⇒子育て支援
- ⇒高齢者の安心確保
- ⇒地域社会の安定



2

住民等への声かけ

キーパーソン等の協力を得て、広く声かけをしましょう。

キーパーソン等は幅広い人脈をもち、地域での信頼も高く、多くの住民が声かけに応えてくれます。

声かけの重複や漏れがないよう、これまでに把握できた情報とキーパーソン等からの情報を取りまとめた上で、声かけの段取りを決めましょう。

また、住民等の中には、活動に参加したい気持ちはあっても機会がなかったり、知らない人たちの中に入り込むのを躊躇している方もいます。まずは、気軽に参加できる場であることを伝え、住民等の参加意欲を高めましょう。

※声かけする人材や団体例

町内会、自治会、地域内の学校等の教育機関、PTA、公共・公益施設管理者と利用者、コミュニティ活動を行うNPOやボランティア、自営業者、企業経営者、地域の名士



○広報誌等も活用

広報誌や回覧板、チラシ等は全ての人が見ているとは限りません。できるだけ多くの手段を使って地域の住民に情報を伝えましょう。

市町村の広報誌・ホームページへの掲載
公共・公益施設等でのチラシの掲示
町内会の回覧版・掲示板での掲示
駅やバス停の掲示板での掲示

活字による情報発信だけでは真意が伝わらないこともあります。広域の情報発信を過信することなく、直接の声かけ

1

活発に話し合う機会に向けて

(1) ワークショップ形式での話し合い

ワークショップ形式で話し合いを進めましょう。

幅広い世代の様々な立場の人が集まり、多様な意見を出し合うには、会議形式よりもワークショップ形式が効果的です。

話し合いは、主催者側の一方的な説明であったり、一部の意見で方向を決めたりするのではなく、参加者の誰もが発言でき、多くの人の理解と賛同を得ながら方向性を決めていくことが大切です。それにはコーディネーターが中心となって進めるワークショップ形式が適しています。

なお、将来的にコミュニティビジネスの立ち上げを見込んでいる場合や、特定の活動を推進するには、コーディネーターだけでなく、事業を自ら推進するためのプロデューサー的な役割を担う人材も必要となります。

○ワークショップ形式のルール

参加者の誰もが自由に意見を出し合うには、進め方のルールが必要です。みんなでルールを守る雰囲気をつくりましょう。また、ワークショップを始める前や進めるなかで、必要に応じて適宜分かりやすくルールを説明しましょう。

ルールの例

- 他の参加者の意見を尊重（批判、否定しない）
- まずは、実現性にとらわれず、自由に発想する
- どうしたらよりよくなるか、という視点が大切
- 「ここがだめ、あれがだめ」だけで終わらせない
- 限られた時間を分かち合う

柔軟な考え方でアイデアを引き出す
考え方を広め、深めてからまとまりをつくる
これらの過程で考え方を

参加者の誰もが意見を出せる
雰囲気が大切です。また、ルールはそのためにあることを参加者自身が理解し、守ることが必要です。



(2) 多様な意見を出してもらう仕掛け

参加者が多様な意見を出せるよう進め方を工夫しましょう。

扱うテーマや参加者の年齢構成、話し合いの成熟度、開催回数等によってワークショップの進め方は様々です。

○まち歩きによる新たな気づき！

住民等は、自分の住んでいる地域全てを必ずしも把握しているわけではありません。テーマを決めて、みんなで地域を歩くと今まで見えなかったことや気づかなかったことを発見することができます。

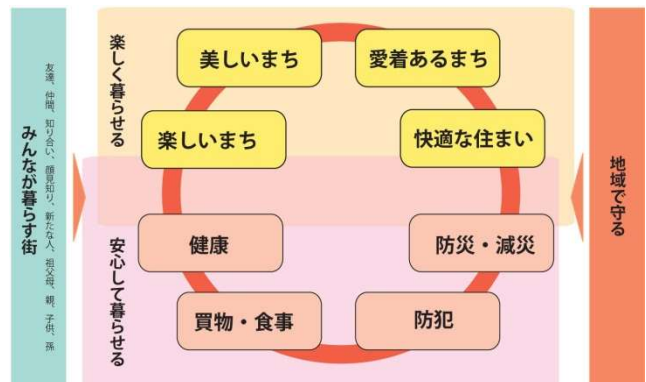
発見をきっかけに、まちの課題や魅力を様々な視点で話し合しましょう。



○参加者の意見等の「見える化」

参加者から出た意見やアイデア等がある程度たまってきたら、その内容を類型化し、整理した上で、参加者に投げ返しましょう。

そこで、参加者自らが、興味のあるテーマを選んでもらい、進めていくことが主体的な取組の第一歩になります。



まちづくりに必要なコミュニティ

○活動状況の紹介

まちの現状や課題を共有するには、地域での活動状況を知ること大切です。地域で活動を行っている人や団体等（参加者の場合も）に、その活動の内容、状況、困っていることなどを発表してもらいましょう。地域の活動をお互いが知ることで、活動同士の連携や活動への協力を得る機会にもなります。



○多様な発想から、新たなアイデアを見つける

参加者同士で地域の課題を共有できたら、どのようにして問題解決に取り組むか話し合いましょう。ここで大切なのは、様々な参加者がいて、考え方も様々であることを前提に話し合うことです。進め方として「ブレインストーミング」などの手法を取り入れると効果的です。

ブレインストーミング

みんなで意見やアイデアを自由に出し合うことで、連鎖反応や発想が誘発され、新しいアイデアを生み出す手法

ルール：○早急に判断・結論を出さない

○自由奔放にアイデアを出す

○アイデアの多さを重視（質より量）

○アイデアを組み合わせる新たなアイデアに

○出された意見についてよしあしの批判をしない

将来、プロデューサー的な存在になり得る人材を地域の内外で探しましょう。

○地域活動をリードするプロデューサー

コミュニティビジネスや地域交流拠点づくりなどの特定事業を推進する場合には、地域をリードするプロデューサーが、はじめから入っていると大変有効です。



2

多世代居住コミュニティへの共通認識

参加者の誰もが自由に意見を出し合い、地域主体によるまちづくりへの理解と意欲が高まってきたら、各市町村が目指す、多世代居住コミュニティの実現に向けた地域主体によるまちづくりの考え方や、実現に向けて進める場合のスケジュール等を説明し、取り組みへの理解と賛同、協力を得ましょう。

(1) 主旨説明等には十分な時間を

理解と賛同、協力が得られるまで、根気よく説明しましょう。

住民が主体という考え方の理解だけでなく、実際に自分たちで行おうという気持ちになることが重要です。

市町村が考える地域主体のまちづくりの必要性について、参加者の理解が得られるまで、時間をかけて、説明を行いましょ。

キーパーソン等への説明と同じく「行政にしてもらおう」ものではないことをわかってもらいましょう。



話し合う機会を継続的に進めることが大変重要になります。説明も、時間をかけて何度も行いましょう。

(2) 地域主体のまちづくりの具体的な事例を紹介

具体的な事例を紹介して、参加者の理解を得ましょう。

事例が一番分かりやすく、参加者の理解を得るには有効です。

様々な地域で地域が主体的に取り組んでいる事例があります。

このような事例を紹介したり、実際に見学して、参加者の認識を新たにして、意欲を向上させましょう。



具体的な事例を交えて説明しましょう。

事例から実現可能な取組と参加者の理解を得やすくなります。さらに、そのような現地を実際に見学して、運営者との話し合いを図ると、気運

事例：横浜市戸塚区・ドリームハイツの取り組み

【活動の経緯】

ドリームハイツは神奈川県住宅供給公社、横浜市住宅供給公社が分譲した 2,270 戸の集合住宅団地です。1972 年の入居開始時、多くの子育て世帯の入居にかかわらず保育所が不足していたため、住民自らが自主運営による幼児教室を開設しました。以来、団地内の問題は住民自らが主体的に解決していこうという機運が高まり、様々な居住支援の取り組みが現在でも続けられています。

現在の取り組みは「高齢者・障害者支援」、「子育て支援」「まちづくり推進」などのジャンルで、参加団体は十数団体に及びます。2007 年には横浜市の「身近な地域・元気づくりモデル事業」に選定され、行政との連携・協働もすすめられています。

【特徴など】

ドリームハイツは定住志向が強く、高齢化が進んでいます。取組みの一つ「ふらっとステーションドリーム」は 2005 年開設、コミュニティカフェの先駆けともいえる活動で、月平均 1200 人もの方が訪れ、高齢化した住民の居場所として大きな役割を果たしています。

具体的な活動内容は、コーヒー、ケーキとランチを提供するカフェを中心に、健康づくり講座等を行うカレッジ、各種相談に応え情報提供を行う情報相談センター、住民の趣味や創作活動を応援するギャラリーやマイショップなどが行われています。

活動の主な担い手となっているのは、60～70 代の地域の方々。地域のため、誰かのための活動ではなく、「自分自身が高齢期を生き生き過ごすため」と考えているそうです。実際、お客さんとして来た方々が、次第に担い手として活動に加わったり、それぞれの得意分野を活かしたイベント企画が立ち上がったりと、カフェでの交流をきっかけに活動の幅が広がっています。



3

話し合う機会のテーマ

(1) はじめのテーマは身近なもの

テーマは身近なものから！

テーマは、参加者が普段の生活で身近に感じているものからはじめていくと参加者にとってもわかりやすくなります。

参加者が話し合いに意欲的に参加してもらうことが、地域主体のまちづくりを進める第一歩となります。キーパーソン等とテーマを絞りこみ、まず初回の住民等が話し合いする身近なテーマなどを出します。また、ワークショップ等を進める中で住民等のニーズが高いテーマが出た場合は、柔軟にテーマを変えて進めていきましょう。

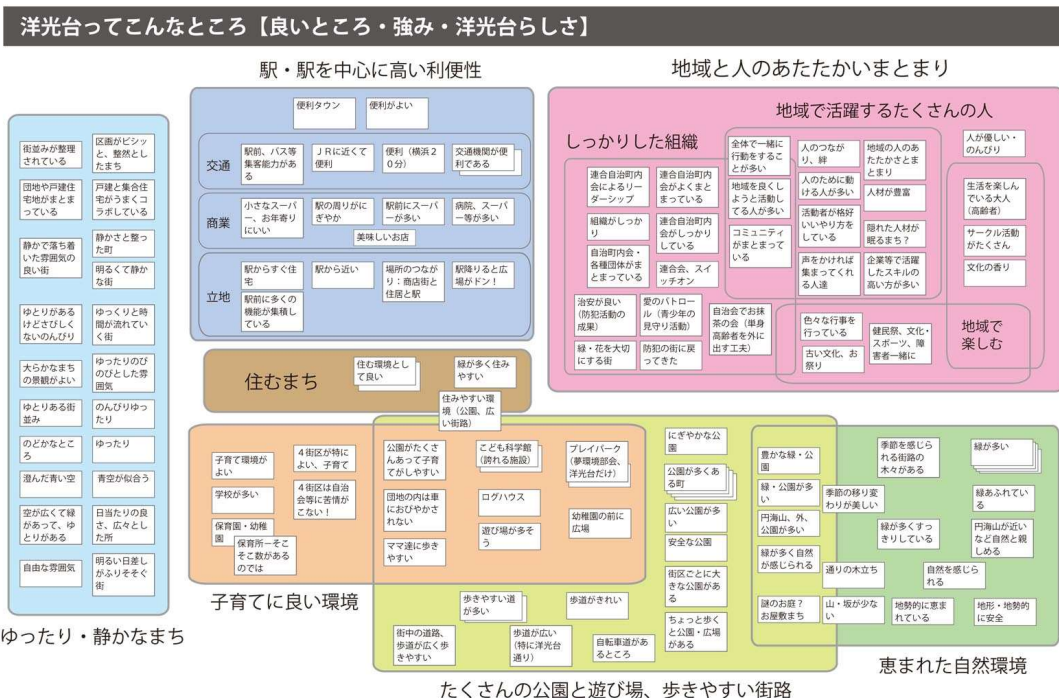
(2) 参加意欲を高め維持する工夫

参加者の意見等を整理して見せましょう！

意見やアイデア等を類型化・整理することで方向性が見えやすくなり、参加者自身が興味あるテーマを選ぶなど、主体的な取組みにつながります。

参加者が話し合う機会に意欲的に参加してもらうことが、地域主体のまちづくりを進める第一歩となります。

<例：洋光台での最初のワークショップ意見の整理（一部）>



4

地域活動や人をつなげ、地域主体によるまちづくりを進める仕掛け

つながり方を見極め、焦らず自然体でつながるようにしましょう。

それぞれの相性やタイミングもあり、必ずしも誰もがつながるわけではありません。良い事だからといって無理は禁物です。

話し合う機会を通じて、住民等が顔見知りになり、それぞれの活動内容や方向性等の考え方を共有化できたら、コーディネーターがつなぎ役となり、連携協働に向けた取組への発展を目指しましょう。

○連携協働に向けて

参加者同士の連携協働の兆しが見えたら、通常のワークショップの他にテーマ別のワークショップを設け、興味のあるテーマでの具体的な取組に向けた連携協働について話し合みましょう。



参加者の主体性を促すために、できるだけ参加者の中からリーダー役を選び、コーディネーターはリーダー役のフォローにまわしましょう。

リーダー役となる人がリーダーの経験が豊富とは限りませんし、そうであってもうまく進まない場合もあります。そんな時はコーディネーターがリーダー役や参加者をサポートして、盛り上げましょう。

第3章 地域でできることの実践

1

小さくてもできることの実践

小さな実践から始めましょう。

うまくいく経験を積み重ねることで、よいイメージが広がり、活動への意欲が高まります。

住民等が取り組みたいとするものの中で、すぐにできることはコーディネーターのアドバイスを受け、住民が主体となって実践しましょう。

○取り組みたいことを整理して、参加者に「見える化」

話し合っているばかりでは、参加者の意欲は薄れていきます。

ワークショップ等で出た取り組みたいことを整理して、参加者に見てもらい、その中で、今すぐにできることを探し、参加者が主体となって実践してみましょう。



<住民の試み>一箱古本市



<住民の試み>桜マップづくり



<住民の試み>キャンドルナイト

小さなことでも企画から実践までの経験は貴重な体験となります。やり遂げた後は達成感と充実感が生まれ、次の行動への自信になります。

実践から学ぶことで、より多世代居住コミュニティへの理解が深まります。

2

実践によって判明した課題の認識と対応

体験を共有し、新たな取組みに役立てましょう。

体験からの発想は、実現性の高い取組みにつながります。

実践により判明したうまくいったこと、うまくいかなかったことを話し合いにフィードバックして、次の取組みに向けた対応を話し合いましょう。

○実践でわかったことを参加者自身が振り返る

考えを実践に移してみると、思いも寄らない様々なことがわかります。

参加者自身が、実践の振り返りを行い、うまくいったこととうまくいかなかったことを整理しましょう。みんなの考えや感じたことをQ&Aやアンケート方式で書いてもらうと整理しやすくなります。

神奈川県担い手養成講座：体験後アンケート（一部抜粋）

- ・多世代交流拠点を運営できるグループが多数存在することが確認できた。
- ・多世代の交流の場としては、ある程度の広さの空間とゆるいスペースが必要。
- ・対象者の年代で求めるものも違うことを改めて実感した。
- ・喜びを提供できて担い手の自分も楽しかった。これからの取組みも自分が楽しいと思うことを推進していきたい。
- ・年齢にかかわらず多世代の交流を望んでいることが分かりました。
- ・若い世代とシニア世代を繋ぐのは40代、50代の主婦がキーマンになりそう。
- ・一番知りたい世代である中学生～OLの声が聞けなかった。残念。
- ・企画・運営メンバーに若者を巻き込むことも必要と感じた。
- ・来場者との会話ができ、また一部の来場者にはその場で催しの手伝いなどもしてもらえ、自分自身として多世代交流を実現できていたと思います。

○参加者同士で話し合う

成功したと思っても、次の実践では失敗する場合があります。次につながるためには、出来るだけ多くの人で話し合い、客観的な視点で分析しましょう。また、うまくいかなかったことは、どうすれば克服できるかみんなでアイデアを出し合いましょう。（場合によってはコーディネーターがアドバイスを）

